



日本英学史とインド：遠くて近い関係

明治10年代から20年代にかけて、本邦で英語や歴史を学ぼうとした人々が、こぞってイギリスの文人マコーレー (Thomas Babington Macaulay, 1800～1859) の著作を読んだことは、日本英学史では、よく知られている事実なのだろう。実際のところ、この間に刊行された翻訳や注釈書などは、各種の版を計上すれば、30点を優に越える。もちろん、それは、イギリスにおける彼の文声を受けてのことであつたが、興味深いことに、その大部分が、インドを題材としたものだったのである。

マコーレーは、英学史では特に関心が向けられてはいないようだが、インド滞在歴を有していた。その時期に彼が果たした役割は、インド近代史において、必ず論及されるほど、重要な意味を持っていたのだ。

19世紀初頭、インドとイギリスの双方において、植民地支配において依拠すべき言語の選択をめぐる、大論争が起こっていた。それは、もっぱら、高等教育の媒介言語をめぐる議論として展開されたが、「文明化の使命」の達成と安定した支配の確立という共通の前提に拠っていた。その論議において、サンスクリット語やペルシア語といった規範的な価値を有する在来言語を推した人々は、オリエンタリスト (東洋語論者) と呼ばれ、

一方、英語至上主義の人々は、アングリシストと呼ばれていた。わけでも後者は、英語こそが普遍的価値を内包することを確信しており、それを共有する「色の黒いイギリス人」を階層として生み出すことを企図していた。

一連の議論のなかで、決定的な役割を果たしたのは、他ならぬマコーレーであった。総督参事会の法務委員として、1834年にインドに着任していた彼は、アングリシストの立場を体現した覚書 (1835年2月2日付) を提出し、それを受けて、当時の総督ベンティンクは、英語の卓越を定めた決議 (3月7日付) を発したのである。それ以降、英語能力そのものが、社会的地位と一体化していったのだ。

明治期の日本において、マコーレーの著作に親しんだ人々は、こうした事情をどこまで把握していたのだろうか。そもそも、そこで取り上げられている事象は、インドに関するかなりの知識を持たないかぎり、容易には理解できないものばかりである。

マコーレーへの関心は、昭和初期にかけて衰微していったが、1942 (昭和17) 年8月に参謀本部がインド侵攻作戦を企図すると、敵性言語として英語が排除されるなかで、僅かながらに甦ったのは、何とも皮肉なことであった。

表紙写真について

スイスの首都ベルンにて

青柳有季 Aoyagi Yuki (東京学芸大学附属小金井中学校)



スイスの首都ベルンの旧市街は、ユネスコの世界遺産に1983年に登録された美しい街です。使用言語はドイツ語ですが、街の至る所ではドイツ語と英語の標識が並んでいます。

ベルンの街の語源は熊 (独: Bär) から来ていて、州の旗は熊の紋章です (写真)。写真の“Bärengraben”の標識は、「熊公園」のことです。実際には熊は2頭見かけましたが、ベルンのシンボルとして「熊公園」は市民や観光客で賑わっていました。

ベルンは時計塔や大聖堂などの建

造物が点在する街で、中世のたたずまいを感じながら街歩きを楽しむことができます。また、旧市街を赤いトラム (路面電車) が走り、おしゃれなショップも立ち並ぶなど、歴史と現在が共存している都市でもあります。

Lauben と呼ばれる石造りの6kmに及ぶアーケードには、彫刻が施され、花に彩られた個性的な噴水が至るところに点在しています。また、毎時4分前になると、時計塔の周りには人が集まり、からくり

時計の兵士や熊の仕掛けを楽しみに見上げています。

市場では、パン、魚、肉、野菜、フルーツ、ワイン、お花などの屋台がゆったりと立ち並んでいます。

店主が常連のお客との会話を楽しみ、お客もエコバッグを片手に新鮮な食材を手にしていました。印象的だったのは、お花屋さんのデコレーションです。シンプルかつ無造作な切花で、愛らしいスイス色豊かな花がひと束ひと束丁寧に銀色の壺に入れて飾られていたのが気に入りました。